東海大学学園史資料センター写真展

建学の地、清水

「声なく教う富士ヶ岳　海濤叱咤す太平洋　三保の松ヶ枝下にして　我等が母校ここにあり」創立者松前重義により作詞された『建学の歌』の一節です。歌詞にあるように、東海大学は、昭和17年（1942）12月に荒波逆巻く太平洋を望む清水の地に学園を設立し、翌年4月に航空科学専門学校を開校したことにはじまります。

今年４月、東海大学は九州東海大学、北海道東海大学の２大学と統合して一つの大学となり、全国に10キャンパス、20学部87学科・専攻・課程を擁する新たな「東海大学」として生まれ変わりました。建学の原点――この発祥の地・清水を拠点として、大学の設立や付属諸学校の設置など幾多の変遷を経て、今日に至っています。激動の時代とともに大きく発展していく学園の姿を、当時の写真や資料で紹介します。

東海大学学園史資料センター

海濤叱咤す太平洋（かいとうしったす）

東海大学「建学の地、清水」関係略年表

年	事　　項
昭和17(1942)	12．8　財団法人国防理工学園設立認可。理事に有馬頼寧･大河内正敏･松前重義･伍堂卓雄･安藤紀三郎･梶井剛が就任。航空科学専門学校(物理科･航空科)設立認可
昭和18(1943)	4．8　航空科学専門学校、第一期生入学式を挙行(於 清水市商工会議所)。校長 野田清一郎 4．9　航空科学専門学校、三保仮校舎(サマーハウス)で講義開始 11．1　航空科学専門学校、本校舎(駒越校舎)で講義開始 12．8　航空科学専門学校、駒越校舎落成式挙行(第一期工事完成)。建学の歌を披露
昭和19(1944)	4.18　電波科学専門学校、入学式挙行(於 東京･九段 軍人会館)。校長 仁科芳雄。〈東京･中野区から東京･府中町へ移転 1945年9月〉 6．1　航空科学専門学校の全寮を駒越校舎に集中。サマーハウス閉鎖
昭和20(1945)	8.15　財団法人国防理工学園、財団法人東海学園と改称。航空科学専門学校と電波科学専門学校を合併して東海専門学校と改称(同年10月東海科学専門学校となる)。本校〈清水市三保〉と分校〈東京･府中町〉を置く
昭和21(1946)	5．1　財団法人東海学園を財団法人東海大学と改称し、旧制東海大学(予科、理工･経文学部)設立認可 10.28　松前重義、教職追放該当者として新聞に発表される(公職追放令該当者指定 同年9月16日) 11.25　東海科学専門学校、勤労青年のための夜間講習会を開設(のち東海実業高等学校に発展)
昭和22(1947)	4．1　東海科学研究所(現 総合科学技術研究所)、設置〈清水市三保〉
昭和23(1948)	4．1　東海科学研究所、産業科学研究所(現 総合科学技術研究所)と改組 4.25　東海実業高等学校、開校〈清水市三保〉
昭和24(1949)	4．1　東海大学第一中学校、開校〈清水市駒越〉 5.10　旧制東海大学、学部開設
昭和25(1950)	4．1　新制東海大学、開校。文学部文学科、工学部電気工学科･応用理学科･建設工学科開設
昭和26(1951)	3．7　私立学校法施行。財団法人東海大学、学校法人東海大学に組織変更認可 4．　東海大学高等学校(旧 東海大学第一高等学校･現 東海大学付属翔洋高等学校)、開校〈清水市駒越〉 10．5　松前重義、教職追放解除(公職追放解除 1950年10月13日)
昭和27(1952)	1.15　学校法人東海大学理事長に松前重義就任(～1991年1月25日) 4．1　短期大学部商科(第二部)、開設〈清水市駒越〉 6．1　東海大学学長に松前重義就任(～1967年3月31日)
昭和28(1953)	4．1　東海大学高等学校・短期大学部(商科二部)、清水市駒越から三保に移転
昭和29(1954)	4．1　東海大学、学生募集停止。(工学部は本年度のみ。文学部は1957年度まで)
昭和30(1955)	1.10　工学部、静岡県清水市から東京都渋谷区代々木富ヶ谷1431番地〈渋谷区富ヶ谷2丁目28番地4号〉へ移転。学生募集再開(文学部学生募集再開 1958年)
昭和31(1956)	7.10　第１回夏季学校、清水市三保で開催(～16日)。松前重義･鈴木成高･安井 郁･平林廣人が講演
昭和33(1958)	4.15　東海大学付属幼稚園、開園式・第１回入園式挙行〈清水市三保〉 11．9　第１回静清地区総合運動会(学園の祭典)開催
昭和34(1959)	4．1　産業科学研究所水産研究部、水産研究所(現 東海大学海洋研究所)と改組。東海実業高等学校(定時制)、東海大学実業高等学校(定時制)と改称。東海大学高等学校、東海大学第一高等学校と改称。東海大学工業高等学校、開校〈清水市三保〉
昭和35(1960)	1.22　ＮＨＫ静岡放送実験局の局舎〈静岡市宮前町〉、東海大学静岡分室(海洋ファックス無線実験局)として使用
昭和36(1961)	8.17　海洋ファックス無線実験局、送信開始
昭和37(1962)	4．1　海洋学部、開設〈清水市折戸〉
昭和38(1963)	4．1　湘南校舎、開設(１号館竣工 5月8日)〈平塚市北金目〉
昭和39(1964)	11．　第１回海洋学部建学祭「折戸祭」開催
昭和41(1966)	4．1　水産研究所、海洋研究所と改組〈清水市折戸〉。東海大学折戸校舎、清水校舎と改称
昭和42(1967)	4．4　東海大学付属小学校、開校式・第１回入学式挙行〈清水市三保〉
昭和45(1970)	5．2　海洋科学博物館、開館
昭和48(1973)	4.27　人体科学博物館、開館(～2000年10月30日)
昭和49(1974)	3.30　札幌校舎海洋学部教養課程を沼津校舎に移転 8．3　航空宇宙科学博物館、開館(～1984年7月31日) 12.22　第１回黒潮旗武道大会開催、以後毎年実施
昭和56(1981)	6．1　三保社会教育センター発足(東海大学社会教育センターに改称　1982年12月1日) 10.26　自然史博物館(恐竜館)開館(人体科学博物館跡に移設　2002年1月)
昭和63(1988)	4．1　沼津校舎海洋学部教養課程を清水校舎に移転
平成13(1999)	4．1　東海大学第一高等学校と東海大学工業高等学校が統合し、東海大学付属翔洋高等学校、開校〈清水市折戸〉。開校式・第１回入学式挙行(4月4日)
平成15(2003)	4．1　東海大学第一中学校〈静岡市宮前町〉、東海大学付属翔洋高等学校の敷地内に移転。付属翔洋中学校と改称〈清水市折戸〉

※地名については、当時の名称を使用しています。

Ⅰ．学園創設と航空科学専門学校

昭和17年（1942）12月8日、財団法人国防理工学園の設置が認可され、静岡県清水市（現・静岡市清水区）に学園本部を置きました。時はアジア太平洋戦争の真っ只中。国防理工学園の名称は当時の世情を表し、「国防」という名がなければ学園創設が難しい、そんな時代でした。

昭和18年（1943）4月、大学の前身にあたる航空科学専門学校が開校し、初代校長には野田清一郎が就任しました。航空科学専門学校は、航空科（後、機械科）と物理科に分かれた修業年限３年・全寮制で、同市三保の地の仮校舎（財団法人国際学友会所有の寄宿舎三保寮）からスタートします。学生は、三保の仮校舎と鉄舟寺を寮として勉学に励みました。10月31日には、駒越の地に新校舎が竣工し、翌月からそこで授業が開始されました。

昭和19年（1944）に入ると戦時色も一段と濃くなり、学生たちにも勤労動員がかかるとともに出征者も増え、勉学もままならなくなっていきます。昭和20年（1945）8月15日には法人名を財団法人東海学園と改称し、9月1日に第一期生の卒業式を迎えました。

開学

昭和16年（1941）の夏から学園候補地の視察がはじまり、最終的に清水の地に決定しました。そして、昭和18年（1943）4月8日、清水商工会議所にて松前重義の他、有馬頼寧、安藤紀三郎、大河内正敏、梶井剛、伍堂卓雄の各理事、および山田勝四郎清水市長らが臨席して第一回入学式が挙行されました。

大学建設予定地視察　昭和18年（1943）1月

大学建設予定地（駒越）　昭和18年（1943）

「建設敷地」の標柱　昭和18年（1943）

第一回入学式（清水商工会議所）
昭和18年（1943）4月8日

校舎新築落成式の会場入口（駒越）
昭和18年（1943）12月8日

新校舎の披露　昭和18年（1943）12月8日

まなびや 学舎

駒越の新校舎が完成するまで三保の仮校舎で授業が行われました。地鎮祭から６カ月、昭和18年（1943）10月31日に竣工した新校舎の設計は、逓信省経理局営繕課長であった山田守（日本武道館や京都タワーの設計者）が担当しました。この校舎は山田の数少ない木造建築で、当時としては先進的でモダンな校舎でした。山田は以後も学園関係の諸施設の設計に携わっていくこととなります。

三保の仮校舎　昭和18年（1943）

仮校舎前の朝礼風景　昭和18年（1943）

建設の進む駒越校舎群　昭和18年（1943）

駒越校舎運動場地鎮祭　昭和18年（1943）5月23日

駒越校舎本館（1943年10月31日竣工）

駒越校舎教室

駒越校舎から望む富士

授業

開校当初、野田校長ほか教授は平岡寛二、荒牧鐵雄のわずか２名でしたが、その後続々と教授陣も増え、授業も充実していきます。中でも、物理科長でもあった牧野不二雄は、その後も長く松前重義とともに東海大学の歴史を築いていくこととなりました。

授業風景　昭和19年（1944）

航空科の実習風景

グライダー飛行訓練（三保海岸）

教材用90式艦上戦闘機（駒越校舎玄関）

寮と学生生活

新入生たちは全寮制のもと、航空科生が仮校舎でもあった三保寮（サマーハウス）を、物理科生が鉄舟寺を、それぞれ寄宿舎として割り当てられました。戦時下で食糧をはじめ物資の不足に悩まされながらも、建学の意気にあふれた教職員・学生が起居をともにする生活は、何ものにも代え難い心の触れあいとなりました。その後、両寮とも昭和19年（1944）6月に閉鎖され、寮生たちは駒越に居を移しました。

三保寮航空科生たち

三保仮校舎の食堂

鉄舟寺にて

鉄舟寺の朝礼風景

戦時下の学園

昭和19年（1944）3月、政府は学徒勤労動員の通年実施を決定、在学・修業年限を短縮された航空科学専門学校の生徒たちは、東京や横浜の工場へ動員されました。また近隣農家への援農作業、学校での軍事教練、米軍爆撃機による空襲に明け暮れる日々は、戦局の悪化を否応なしに認識させるものでした。

軍事教練の風景　昭和19年（1944）5月

勤労奉仕の学生たち　昭和19年（1944）3月

勤労動員を前にして（三保海岸）
昭和19年（1944）5月

出征を前に日の丸に寄せ書き
昭和19年（1944）5月20日

出征する学徒（清水駅ホーム）　昭和19年（1944）5月

学徒勤労動員（横浜・日本飛行機にて）
昭和20年（1945）1月27日

三保海岸に不時着した一式戦闘機

戦後に解体された水上飛行機

Ⅱ．東海科学専門学校

航空科学専門学校の開校に続いて、昭和19年（1944）1月、財団法人国防理工学園理事会は電波技術者の養成を図るため、電波科学専門学校（電波工業学校・電波兵器技術錬成所を併設）の設立を決議し、同年4月18日、同校は東京都中野区江古田の校舎において開校しました。

敗戦の日の昭和20年（1945）8月15日付で、航空科学専門学校は電波科学専門学校と合併して「東海専門学校」となり、戦後の新たなスタートを迎えたのです。東海専門学校は駒越校舎を本校とし、9月に江古田にあった校舎が東京都北多摩郡府中町に移転し府中分校となります。さらに10月20日に校名を「東海科学専門学校」と改めた直後、駒越本校と府中分校に分散した校舎を一本化するべく、旧海軍三保航空隊の敷地と校舎を確保しました。府中分校は昭和23年（1948）3月に移転が完了し、駒越本校も旧制東海大学予科の開校にあわせて三保校舎に移転して、昭和25年（1950）の新制東海大学発足まで存続しました。東海科学専門学校は大学設立という大きな目標に向けて、その基盤としての役目を果たしました。

1947年の三保半島　米軍撮影

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の航空写真及び米軍撮影の空中写真を複製したものである。
（承認番号　平20関複　第142号）

駒越校舎玄関前にて　昭和20年（1945）11月

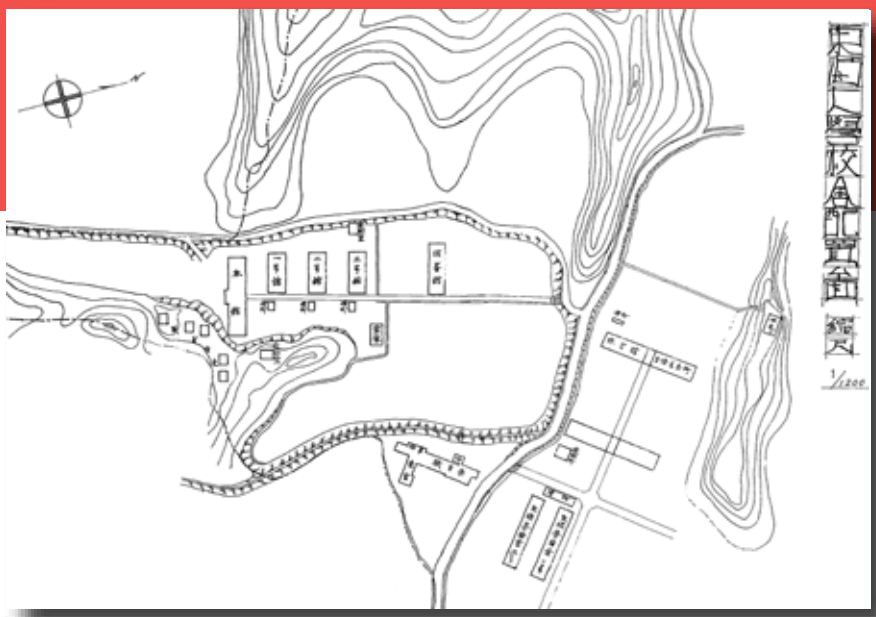
三保校舎――旧海軍三保航空隊の建物

建学祭の運動会風景　昭和21年（1946）10月28日

Ⅲ. 旧制東海大学認可

敗戦後の復興の中、学園は専門学校から大学への昇格をめざしました。校舎・土地は山田勝四郎清水市長と清水商工連盟の後援のもと、旧海軍三保航空隊の敷地と建物の払い下げを受けました（旧第一高等学校周辺）。研究設備は東海科学専門学校府中分校から機材を移し、旧陸軍の技術部から機器類の譲渡を受けました。また、図書についても足利惇氏理事の尽力によって整備され、昭和21年（1946）5月に旧制東海大学の設立が認可されました。同時に、財団法人名も学校法人東海大学と改称し、ここに名実ともに東海大学が誕生しました。

初代学長には梶井剛理事が就任し、予科（旧制大学入学への予備教育機関）と理工学部・経文学部（1949年学部開設）が設置され、初めて女子学生も入学しました。順調と思われた学園ですが、本学設置認可直後に松前重義が公職・教職追放該当者として一時学園を去ったこともあって、学園の前途に暗雲が立ちこめます。



駒越校舎配置図

昭和25年（1950）に文部省に提出された申請書に添付されていたもの（独立行政法人国立公文書館所蔵）。青焼き図面の階調をデジタルで反転処理した。

旧制大学駒越校舎の予科（理科）生たち

大学創設記念特別講演会（静岡市公会堂）
昭和21年（1946）11月4日

駒越の学生寮「望星寮」

前田寿雄教授のゼミ風景　昭和26年（1951）12月

初めての東海大学女子卒業生たち
昭和28年（1953）3月5日

Ⅳ．新制東海大学の開校

敗戦後の日本を支配した占領軍の政策として、学制改革が行われました。昭和22年（1947）に施行された学校教育法で「６・３・３・４制」が確立し、東海大学も昭和25年（1950）に新制大学として認可されました。旧制のカリキュラムも併存させながら（昭和27年度卒業生が最後の旧制東海大生）、新制のカリキュラムは工学部と文学部の２学部でスタートします。しかしその船出は、嵐の中、大渦にのまれるようなものでした。

敗戦後の厳しい世相とともに、学制改革による情勢の変化は、大学の経営を破綻寸前へと追い込みました。旧制予科からの進学者は半数にも満たず、旧制学部からの編入者もごくわずかでした。他の教育機関からの進学者は皆無に等しく、募集人員240人に対して入学者は40人あまりで、給料の遅配・欠配から教員も一人、また一人と学園を去っていったのです。

公職・教職追放解除となった松前重義が、昭和27年（1952）に学園に復帰すると、瀕死の危機にあった学園を立て直すため、東京への移転を決断します。

三保校舎配置図

青焼き図面の階調をデジタルで反転処理した

発足まもない駒越本部校舎　昭和25年（1950）4月

三保校舎グラウンド正面の富士

新制大学工学部三保校舎の正門　昭和25年（1950）5月

新制大学工学部の新築校舎　昭和25年（1950）8月

建学祭の仮装行列　昭和26年（1951）10月29日

Ⅴ．海洋学部、誕生

昭和30年（1955）に大学本部が東京へ移転した後も、清水には「水産研究部」が残り、カツオ・マグロ遠洋漁業などに関する研究を継続、建学の地に深く根を張り続けていました。同研究部は昭和34年（1959）に「水産研究所」へと発展的に改組。さらに松前重義学長は「水産学部」設置という構想を打ち立てます。やがて新学部の構想は、海洋開発の全般にわたる、新たな可能性を開拓すべく、「海洋学部」へと飛躍していきました。

しかし昭和36年（1961）9月に文部省へ提出した設置認可申請は、旧来の基準にないことを理由に、保留となってしまいます。大学は問題点の改善や関係各所への趣旨説明を重ね、昭和37年（1962）2月、ようやく認可へとこぎ着けました。同年4月、1期生107人を迎え海洋学部が誕生。それは同時に東海大学が移転後わずか7年で、清水に学部を再建した新たな出航でもありました。拠点となった折戸校舎は、旧東京商船大学の土地と建物を利用しました。昭和40年（1965）に現在の1号館が竣工し、以降続々と校舎が建設されました。海洋調査実習船の「東海大学丸」や「望星丸」の就航など諸設備も充実。当初「海洋工学科」「海洋資源学科」の2学科だけだった学科も、次々に増設されていきました。

1961年の三保半島

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の航空写真及び米軍撮影の空中写真を複製したものである。
（承認番号　平20関複　第142号）

海洋学部創設祝賀会（東京神田・学士会館）
昭和37年（1962）3月13日

折戸校舎でスタート――旧東京商船大学の建物

新館落成（現1号館）　昭和40年（1965）5月6日

海洋科学博物館開館　昭和45（1970）5月2日

東海大学丸（Ⅰ世）
昭和37年（1962）5月就航［191トン］

望星丸（Ⅰ世）
昭和46年（1971）7月就航［1,103トン］

望星丸Ⅱ世　昭和54年（1979）2月就航［1,218トン］

望星丸　平成5年（1993）10月就航［2,174国際総トン］

東海大学丸Ⅱ世　昭和43年（1968）1月就航［701トン］

1979年の三保半島

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の航空写真及び米軍撮影の空中写真を複製したものである。
（承認番号　平20関複　第142号）

沿岸調査中の近海用調査実習艇「北斗」
昭和42年（1967）3月就航［19トン］

学園百景―清水の付属校―

付属翔洋高等学校・中学校

旧第一高等学校

旧工業高等学校

付属小学校

付属幼稚園（旧園舎）

清水の付属校による三保松原美化運動

2004年　撮影

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の航空写真及び米軍撮影の空中写真を複製したものである。
（承認番号　平20関複　第142号）

《協力者・機関》敬称略

篠原幸子　永井彰　池松政人　魚谷逸朗
独立行政法人国立公文書館　国土交通省国土地理院関東地方測量部
東海大学理事長室　東海大学広報部（代々木校舎）　東海大学出版会
東海大学学長室企画課（湘南校舎）東海大学清水事務部
東海大学ファシリティ部（湘南校舎）　東海大学海洋学部
東海大学社会教育センター　東海大学同窓会　東海大学付属翔洋高等学校
東海大学付属幼稚園　株式会社桜映社

※本パンフレットは、平成20年（2008）10月28日より11月3日まで東海大学清水キャンパス１号館１階ロビーと同年10月30日から11月6日まで東海大学サテライトオフィス地域交流センターで開催の学園史資料センター写真展「建学の地、清水―海濤叱咤す太平洋―」に展示する資料の図録である。

発行日　2008年10月28日
編集　椿田 卓士（学園史資料センター 学園史編纂員）
目七 哲史（　同上　）
デザイン　目七 哲史・徳原 彩恵
発行　東海大学学園史資料センター
〒259-1292　神奈川県平塚市北金目1117
TEL.0463-50-2450（直通）　FAX.0463-50-2449
0463-58-1211（代表）　内線：5251～5254
印刷　株式会社プリントパック